

筑摩世界文學大系

54

ロマン・ロラン

II

高田博厚 訳
平岡昇



筑摩書房

筑摩世界文學大系 54

昭和四十六年四月十五日

初版第一刷発行

ロマン・ロラン II

訳者代表

高田博厚

発行者

竹之内静雄

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 大日本法令印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20654 (出版社) 4604

目次

	ジャン・クリストフ	高田博厚訳	
	第七卷 家の中		5
	第八卷 女友達		85
	第九卷 燃ゆる荊		166
	第十卷 新しき日		254
	ベートーヴェンの生涯	平岡昇訳	343
	ロマン・ロランの想い出	ルネ・アルコス 西本晃二訳	381
解説		高田博厚	388
年譜			395

ロ
マ
ン
・
ロ
ラ
ン
Ⅱ

ジャン・クリストフ

第七卷 家の中

一

おれには一人の友がある……懊悩の最中にあるとき、すがりつける一つの魂、喘ぐ胸の動悸がおさまるのを待ちつつ、ようやく息がつける安穩な避難所を見出した安らぎ！ もう一人ではない。絶えず武装していて、目を開けていて、眠りもやらず、充血していて、しかも疲労困憊して敵に捕われてしまふ、もうそんなことはない。おのが全存在を託し、向うもまたその全存在をこちらに託する、親愛なる伴侶を持つ。ついに憩いを満喫する。こちらが眠るときには彼が見張っていてくれ、彼が眠るときには彼が子供のようにこちらを信頼している愛する者を、守ってやる喜びを知る。彼におのれを任せ、彼がこちらの心の奥底まで知りつくしている、意のままにしているのを感じる最大の喜びを知る。長年の生活苦にくたびれ、すり切れ、

老いて、友の体の中で若返り、新たに復活する。新しい世界を彼の目で味わい、この世の須臾の美わしさを彼の感覚で抱きしめ、生きることのすばらしさを、彼の心でむさぼる……ああ、苦しみさえも喜びである。友といっしょにあるならば！

おれには一人の友があるのだ！ 自分から遠く、自分に近く、常に自分の中に、おれは彼を所有し、おれは彼のもののなのだ。わが友はわれを愛す。わが友はわれを所有す。愛はわれらの魂を、融け合った一つの魂にして、所有しているのだ。

ルーサン家の夜会の翌朝、目を覚ましてクリストフが第一に思ったのは、オリヴィエ・ジャンナンのことだった。すぐにも彼に会いたくしたまらなかった。起きるとただちに出かけた。まだ八時になっていず、生暖かい、すこし重苦しい朝だった。早くも四月の陽気で、嵐を含んだ霧がバリにたなびいていた。

オリヴィエは、サント・ジュヌヴィエーヴ丘の堀の、植物園近くの露地に住んでいた。家は通りのいちばん狭いところにあつて、階段が薄暗い中庭の奥にあり、不潔で雑多な匂いを放っていた。急なまわり階段は、鉛筆の落書きで汚れた壁のほうに傾いている。四階まで昇りつめると、灰色の髪を乱しただらしない肌着のまの女が、足音を聞いて扉を開けたが、クリストフを見ると乱暴に閉めてしまった。一つの踊

場にたくさんの住居があつて、建て付けの悪い扉の隙間から、子供が押し合ったり泣きわめいているのが聞こえる。不潔で凡俗な生活が、胸が悪くなるような中庭を囲んで、低い各階に積み重なつてうごめいている。クリストフは気が持が悪くなつてしまひ、ここの人間とは思ひがよくてこんなところにいるのか、田舎にはいっぱい空気があるのに、そこを離れてどんな利益のために、このバリで、墓場みたいなところに閉じこもつて暮しているのか、とあやしんだ。

オリヴィエの階に着いた。呼鈴のかわりに綱がゆわえてある。クリストフがあまり強く綱を引っ張つたので、その音に同じ階のいくつもの扉が、また半分ほど開いた。オリヴィエが扉を開けた。簡素だが手入れの行き届いたきちんとした身なりに、クリストフはおどろいてしまった。この身だしなみは、他の場合だったらべつに気にも止めぬだろうが、ここでは意外な愉快さだった。この不潔な雰囲気の中で、なにか微笑ましい健康なものがある。ただちに彼は、昨夜と同じ感じをオリヴィエの明るい目に見出した。手を差し出した。オリヴィエはびっくりして、口ごもつた！

「あなたが、あなたがこんなところへ……」クリストフは、相手の露わな気兼ねの中に、愛すべき魂をつかむことばかり考えていて、返事もしないでただ微笑んでいた。そしてオリヴィエを押して行つて、寝室にも書斎にも使ふ、たった一つきりの部屋に入った。狭い鉄の寝台が窓際の壁に寄せてある。長枕の上に枕がい

くつも重ねてあるのが、クリストフの目に止ま

った。椅子が三脚、黒塗りの机が一つ、小さい
ピアノ、本棚の書物、が部屋を埋めている。そ
の部屋はひどく手狭で、天井が低く、日射しが
悪い。けれども、その住人の目のように澄ん
で映えていて、すべてが、女が手を入れたよう
に清潔で整頓されている。壁にさしてある数輪
の薔薇の花が、古いフィレンツェの絵の写真で
飾られている四方の壁に、いくらか春をもたら
している。

「それじゃあなたは、ぼくに会いに来てくださ
ったんですか？」オリヴィエは感激して、繰り
返し言った。

「だって来なけりゃあ。君は来っこないもの」
「そう思いますか？」

オリヴィエはそう言ったが、すぐ、
「そう、ほんとうだ。そう思われるのも無理は
ありません」

「どうして来れないんです？」
「ぼく、行きたくてたまらなかったからです」
「なるほどね、これはごもっともだな」

「ほんとうですよ。冗談じゃないんです。あな
たが、そんなに会いたくないんじゃないかと思
って」

「ぼくもやっぱりそう思ってたんですよ。ぼく
は君に会いたかったんです。それで来てしまっ
た。それが君に嫌かどうか、この目で見てやろ
うと思っただけ」

「よっぽど良い目でないかわかりませんよ」
二人は顔を見合せて笑った。

オリヴィエは続けた。

「昨日ぼくは馬鹿でした。あなたの気を悪くし
はしないかと、心配していたのです。ぼくの臆
病ときたら、まったく病氣なんです。なにも言
えなくなってしまう」

「気にすることはいいですよ。君の国には、お
しゃべりが多すぎると。ときどき黙っている人
に会うのは、幸福すぎるほどですよ。臆病のせい、
つまり心ならずもにしたってね」

クリストフは、自分の皮肉が気に入って、笑
った。
「そんなら、ぼくが無口だから来てくださった
んですか？」

「そう、君が無口だから。君の沈黙の徳のため
にね。沈黙にだって、いろんな種類があります
がね、ぼくは君の好きなんですよ。それだけ
ですよ」

「どうしてぼくんにかに、同情するんです？
ろくにお会いしてないのに」

「それは、ぼくのことだ。ぼくは選ぶのに時間
はかけない。ぼくは、この人生で好きな顔に出
会おうと、すぐ決心して、追いかけるんだ。どう
してもそれといっしょになりたいんですよ」

「追いかけて行って、間違いだったことないで
すか？」
「大いにある」
「今度も、間違ってるかもしれないよ」
「そのうちにわかるでしょう」

「そうになったら、ぼくは駄目になってしま
う。ぼく、あなたが怖いですよ。あなたに見られて

いると思うだけで、ぼくはなんにもできなくな
ってしまう」

始終赤くなったり蒼くなったりするこの感じ
やすい顔を、クリストフは珍しそうに、そして
好意をもって眺めていた。水に映る雲のように、
さまざまな感情が通り過ぎる。

「なんという神経質な子だろう！」と彼は思っ
た。「女みたいだな」静かにその膝に触って、
「ね、ぼくが武装してここへ来た、君、思
いますか？友人を台にして心理学をやるやつな
んで、ぼくは大好きですよ。ぼくがほしいのは
ね、互いが自由であって、誠実であって、感じ
るままに率直に、うわべの恥もなく、打ち解け
ないという懸念もなく、反対するのを恐れもせ
ず、打ち明け合う権利——すぐ後にもう愛さな
くなっても、ただ今、愛しているという権利、
これなんだ。これ、男らしくて、立派じゃあな
いんですか？」

オリヴィエは真剣に彼を見て答えた。
「たしかにそうです。そのほうが男らしい。そ
れにあなたは強い。だけどぼくはそうはいきま
せん」

「いくとも。君は強いんですよ」クリストフ
は答えた。「ただ違ったやり方だね。ともかく
ね、ぼくは君の強さを助けようと思ってやって
来たんだ、君が望むならばですよ。なぜって言
うと、さっき、あんなこと言ってしまったから
いっそう明らかに言うんだが、でなければ言
えないけれど——明日のことは知らんけれども
——ぼくは君が好きなんだ」

オリヴィエは耳まで赤くなり、まごついてしまつて、なんと返辞したらいいかわからなかった。

クリストフは周囲を見回した。

「ひどい住居だなあ。他に部屋はないの?」

「物置があるだけです」

「うふ。息もできない。よくこんなところにいますね」

「馴れますよ」

「ぼくは馴れないなあ、絶対に」

クリストフはチョッキの胸を開けて、力いっぱい呼吸した。

オリヴィエは立つて、窓を開け放した。

「クリストフさん。あなたは都会にいます、さぞ不愉快でしょうね。ぼくには、自分の力のせいで苦しむなんていう心配はないのです。どこでも呼吸できるほど、息が小さいんです。それでも夏の夜は、いくらぼくにでも苦しいことがあります。そいつが来ると思うと、びくびくするんです。すると、寝台に坐りこんでしまつて、今にも窒息しそうになるんですよ」

クリストフは、寝床に横たわっている枕と、オリヴィエのくたびれた顔を見た。そして、闇の中にもがいている彼を見た。

「ここを出たまえ。なぜここにいますか?」
オリヴィエは肩をしゃくって、そつけないで答えた。

「ここだって、他所だって、同じですよ」

重い靴音が天井の上を歩いていった。下の階では、金切声が言い争っていた。そして壁は一分

置きに、通りの乗合馬車の響きで揺れた。

「それに、この家はひどいや!」クリストフは続けた。「汚なくて、むれきつていて、おそろしくみじめだ。夜になって、よくこんなところへ帰って来られるなあ! がっかりしないですか? ぼくには、とても生きられない。橋の下に寝るほうがましだ」

「ぼくも、はじめのうちは、つらかったですよ。あなたと同じに、嫌になりました。ぼくは、子供のころ、散歩に連れて行かれたとき、ごみごみした汚い道を通ると、胸がつまったんです。人に言えないような、妙な恐ろしさに襲われるんです。今ここで地震があったら、ぼくは死んだままここに永久にいるんだ、と思いました。」

それがいちばんたまらない不幸に見えたんですね。そんなところへ他日自分から好んで住んで、それからそこでたぶん死ぬんだらうとは、思いもしませんでした。でも、むつかしいことは言っておれない。今だってぼく嫌なんですが、考えないことにしているんです。階段を上るときには、目も耳も鼻も、感覚全部を閉ざしてしまつて、自分の中にもぐりこむんです。それから、あそこに屋根の向うに見えるでしょう、アカシヤの樹の梢が。ぼくは、あれだけしか見えないようにこの隅に坐るんです。夕方、風であの梢が揺れると、ぼくはバリから遠いところにいる気になるんです。あのレースのような葉がさらさらとそよいでいると、見たこともない、おだやかな森林が波打っているように、思えるんです」

「なるほどね」クリストフは言った。「君はいつも夢見ている人だ、と思っていた。けれども残念なことには、意地悪い生活との闘いのために、他の生活を創造するはずの幻想の力を、磨り減らしてしまうのだ」

「たいていの人間の運命ではないですか? あなたも、怒りや闘いに自分を費してでしゅう?」

「ぼく? 同じじゃない。ぼくは闘うようにできているんだ。見たまえ、ぼくの腕と手を。闘うのがぼくの健康なのだ。けれども、君は、うんと力があるとは言えないね。わかりますよ、結局」

オリヴィエは自分のやせた拳を憂鬱に眺めて言った。

「そう。ぼくは弱いんです。いつだってそうでした。しかし、どうなります? 生きなければならぬ」

「どうして生活してるの?」

「出稽古してるんです」

「なに?」

「なんでも屋です。ラテン語やら、ギリシア語やら、歴史の復習。大学入学の準備。ある公立学校で道徳の講義までやるんですよ」

「なんの講義だつて?」

「道徳の」

「へえ、そいつは馬鹿なことだなあ。君たちの学校では、道徳を教えるの?」

オリヴィエは笑った。

「そうなんです……」

「それで、十分以上しゃべる種がありますかね？」

「一週間に十二時間ですよ」

「すると、悪いことをするのも教えるんだね？」

「どうして？」

「善とはなにかを知らせるのには、そんなにしゃべる必要はないさ」

「と言うより、知らせないためにしゃべるんでしょう」

「まったくだ。知らせないためにね。そいつは悪いやり方ではないな。善は学問ではない、行為ですよ。道徳についてべちゃくちや論じるのは、神経衰弱のやつだけさ。そして最上の道徳は、神経衰弱にならないことだよ。術学者どもめ！自分が賢人のくせに、人に歩くことを教えようとする」

「彼らはあなたのためにしゃべってはいませんよ。あなたは知っていても、知らない者がたくさんいますよ！」

「そんなら、ね、そいつらを赤ん坊みたいに、四ん這いのまま放っておけばいい。そのうちに自分で覚えるよ。しかし、足二本で歩こうと、四本で歩こうと、第一のことは、歩くことだ」

四歩も歩いたら壁にぶつかる部屋の中を、彼は大股に歩いた。そしてピアノの前に立ち止まり、蓋を開け、楽譜を繰ってみ、鍵盤を叩いてみて言った。

「なにか弾いてください」

オリヴィエは飛び上がった。

「ほくが！とんでもない」

「ルーッサン夫人が言ってしまったよ。君は立派な音楽家だって。さあ、弾きたまえ」

「あなたの前で？ そんな、生命が縮まりますよ」

心から出たこの無邪気な叫びに、クリストフは笑い出したが、オリヴィエも困ってしまった。「いったい、フランス人の理由ってのは、なんですかね？」クリストフは言う。

オリヴィエは依然拒む。

「でも、どうして？ どうしてぼくに弾かせるんです？」

「後で言いますよ。さあ弾きたまえ」

「なにを？」

「君の好きなもの、なんでもいい」

オリヴィエは溜息をついて、ピアノに坐り、自分を選んでくれた友の逆らい得ない意に従ったが、それでも長いあいだためらったあげく、モーツァルトの美しい「ロ短調アダジオ」を弾き出した。はじめのうちは、指が震えて鍵盤を強く打てなかったが、次第に大胆になり、モーツァルトの言葉を繰り返しているだけなのだ、

と思つて無意識におのが心を吐露した。音楽は遠慮のない打ち明け手であり、もっとも内密な思念をもむき出しにしてしまう。モーツァルトの「アダジオ」の霊妙な構図の下に、クリストフは、モーツァルトののではない、弾奏している未知の友の、目に見えぬ容相を見出した。純で惚れっぽくてすぐ赤くなるこの神経質な人間の、清朗な憂鬱、内気で優しい微笑。しかし、曲の終りに行つて、切ない愛の楽句がたかまり砕け

る頂点に達すると、オリヴィエはどうにもならない恥ずかしさを感じ、続けられなくなった。指がきかず、音も出ない。ピアノから手を引いて言った。

「もうだめです」

彼の後ろに立っていたクリストフは、屈みこんで両腕を彼に添え、中断した楽句を弾き終わから言った。

「これで、君の魂の音色がわかった」

オリヴィエの両手を取りながら、その顔をまともにしげしげと眺めていたが、やがて言った。

「ふしぎだなあ！……君には以前会ったことがある……ぼくはずっと以前から、君をよく知っている！」

オリヴィエの唇が震えた。いまにも話そうとしたが、しかし口をつぐんだ。

クリストフはまだしばらく彼を見つめていた。それから黙ったまま微笑して、そして出て行った。

*

晴れ晴れとした気持で彼は階段を降りて行った。おそろしく汚ない小僧っ子が二人上つて来て、すれちがった。一人は丸形パンを、もう一人は油の壘を抱えている。彼はなれなれしく二人の頬ぺたををつねてやった。しかめっ面の玄関番にも微笑を送った。街へ出て、小声で歌いながら歩いて、リェクサンブル園まで来てしまった。木陰の腰掛に横たわって目を閉じ

た。空気は静まりかえっていて、散歩する者はほとんどいない。噴水の強まったり弱まったりする音が遠のく。ときどき砂の上を歩く足音がする。クリストフはたまらなく物憂くなり、日向の蜥蜴^{トカゲ}みたいに、うっとりしていた。木陰はもうとくに彼の顔から離れていたが、彼は体を動かそうともしなかった。さまざまに思ひがぐるぐる回る。それを捕えようとするけれども、いずれも幸福な光の中に浸っている。リニクサンブル宮の大時計が鳴った。彼はそれを聞いていなかったが、すぐ後に、十二時を打ったような気がして、いっぺんに起き上がった。二時間もぶらぶらして、へヒトに会う約束^{約束}の間にも間に合わず、午前中を無駄にしまったのに気づいて、笑い出した。そして口笛を吹きながら家へ戻ったが、商人の呼び声に合わせて経文歌の『ロンド』を吹き、その物悲しい旋律さえも陽気な調子になった。町内の洗濯屋の前を通って、いつものように店の中をちらりと見ると、艶気のない赤毛の小娘が、熱気で顔を真っ赤にし、細い腕を肩までむき出し、胸をはだけてアイロンを掛けていて、例のごとく、図々しく彼に色目を使った。はじめて彼は気色を悪くしないでその目つきを受け流し、また笑い出した。部屋に戻って、投げやりになっていたいろんなことが、少しも気にならない。帽子や上衣やチヨッキをあちこちに放りだして、世界を征服するように気負って仕事についた。方々に散らばっている草稿を取り上げてみたが、頭はそこになく、ただ目で読んでいるだけである。数分も

すると、リニクサンブルにいたときと同じような楽しい夢心地に落ちてしまい、頭は空っぽになってしまふ。二、三度はそれと気づいて、奪^{さら}い起とうとするが駄目である。愉快に「ちくしょう！」とどなって立ち上がり、金盥の水の中に頭を突っ込んだ。すこししゃんとしたので机に坐った。黙ったままぼんやり微笑して、また夢想していた。

「これと恋愛とは違うのかな？」

本能的に、それが恥ずかしいことみたいにつり考へはじめ、肩をしゃくった。

「愛するのに、二つのやり方があるものか……いや、いや、二つある。自分の全部をあげて愛するのと、表面の部分だけしか愛に与えないのとある。神よ、そんなけちな心をくださいなすな！」

それから先のことは恥ずかしくなって考えなかった。長いあいだ彼はおのが内部の夢に微笑んでいた。心は沈黙の中で歌っていた。

きみはわれのもの、そしてかつてなき、今こそわれはわれのもの……

Du bist mein, und nun ist das Meine meiner als jemals...

彼は紙をとりあげた。そして静かに、彼の心が歌っているものを書き止めた。

*

彼らは共同して一つ住居に住むことに決めた。

クリストフは、先払い家賃の一月半分を損するのしかまわず、さっそく引越そうとしたが、オリヴィエのほうは、愛情では同様だけれども、より慎重だから、二人の家賃の期限が切れるまで、待つほうがいいと言った。クリストフにはそういう計算がわからない。金のない連中の多くと同じく、金が無くなるのを気にかけない。彼はオリヴィエが自分以上に困っていると思っている。ある日、友が一文なしなのに驚き、不意に出て行って、二時間たって戻って来て、得意げに幾枚かの五フラン銀貨を並べて見せた。へヒトから前借してきたのである。オリヴィエは赤くなって断わった。クリストフはむくれて、中庭で音楽をやっていたイタリア人に、貨幣を皆投げてやろうとした。オリヴィエは引き止めた。クリストフは表面は怒って出て行った。実は、オリヴィエに断わられた自分のへまに、腹を立てていたのである。ところが友から手紙が来たので、傷はたちまち癒えてしまった。オリヴィエは、クリストフを知った幸福、彼が自分のためにしようとしてくれたことへの感激など、じかに話せなかったことを書いたのであった。クリストフは、十五歳のとき友オットーに書いた手紙を思わせるような、気遣いじみた熱烈な手紙で答えたが、感情に溢れ、むちゃくちゃで、フランス語、ドイツ語ごちゃ混ぜの駄洒落ばかりか、楽譜まで付けてある。

ついに二人は住むことになった。モンパルナス界限、ダンフェル広場近くの古い家の六階に、ごく狭い、三部屋と台所の住居を見つけた。四

方壁に囲まれた小さな庭に面していて、彼らの階からは、側の壁より低い正面の壁越しに、パリにはまだたくさんある、人に知れない隠れた修道院の広大な庭園の一つが見え、そのかなたに眺望が広がっている。庭園の小径には人影もなく、リニクサンブル園のより高くて茂った老樹が、日を受けてそよいでおり、小鳥の群れがさえずっている。明け方には鶉コウノトリの笛のような歌がはじまり、次いで雀の騒がしい調子をとった合唱となる。夏の夕方には、燕が夢中に叫びながら光る空気を断ち切り、空を乱れ飛ぶ。そして夜になると、月光の下で沼の表面に上ってくる泡みだいに、蝦蟇が玉を転がすように鳴く。大地が熱気で震えているように、重い車の地響きでこの古ぼけた家がひっきりなしに震動していなかったなら、ここがパリであるのを忘れるであらう。

部屋の一つは他の部屋より広くて綺麗だった。二人はそれを譲り合って争い、籤くじを引くことにした。クリストフの思いつきだったが、彼は悪知恵を働かせて、われながら巧くやったと思うほど、自分に当らないように細工した。

それから、二人にとって、ほんとうの幸福な時期が始まった。幸福は、これと明らかにわかるものの中にあるのではなく、すべてのもに同時にあり、それは彼らの行為や考へに滲みわたり、一瞬も彼らから離れなかった。

この友情の蜜月、深い無言の喜びに満ちた当初の時期、これは、

世界の中で、おのが魂よと呼び得る者

...Ja, wer auch nur eine Seele seine nennt
auf dem Erdenrund...

のみに知っていることである。二人はほとんど口をきかず、あえてきこうとしなかった。互いに傍におり、顔を見合し、ながいこと黙っていても、同じことを考えていたことがわかる。ひと言を言うだけで十分だった。問いかけてもせず、顔を見ないでいて、二人は絶えず会っていた。愛する者は、無意識に愛する者の魂に同化する。相手を傷つけない、相手の全部でありたいと熱烈に願って、ふしぎな不意の直観によって、相手の内奥のかすかな動きをも、読みとる。友は友に対して透明であり、おのが存在を交換する。顔つきが似る。——魂が似る。——ある日までではある。その時が来ると、深い力、民族の魔が不意に躍り出て、今まで包んでいた愛の衣を引き裂いてしまう。

クリストフは小さい声で話し、そつと歩いて静かにしているオリヴィエの隣の部屋で、音を立てないように用心していた。彼は友情のおかげで変ってしまい、今までかつて見なかったような、喜びと信頼と若さの表情をしていた。彼はオリヴィエを讃美しており、オリヴィエはこれを身にあまる幸福だとして赤くならなかったら、いくらでも自分の力を濫用できたろうが、自分はクリストフより遙かに劣っていると思っ

ているし、またクリストフも友に劣らずおのれを卑下している。この相互の卑下は、彼らの大きな愛情から来ているのでいっそう優しくなった。友の心の中に、自分が大きな場を占めている——自分がそれに値しないこと知りつつも——のを感じるのには、うれいものである。二人は互いにしみじみと感謝していた。

オリヴィエは自分の書物をクリストフのといっしょにしてしまつて、区別をつけなかった。そしてその一冊のことを話すときには、「ぼくの本」とは言わないで、「ぼくたちの本」と言った。共同の財産としないで自分の所有としている品物は、ごくわずかしがなく、それらは彼の姉のものであったか、彼女の思い出につながっているものだった。クリストフは愛情のおかげで敏感な心を持つようになり、まもなくそのことに気づいたが、理由はわからなかった。今まで彼は、オリヴィエに両親のことをあえて聞かず、ただ両親を亡くしたことだけを知っていたが、愛情ゆえのすこし昂ぶった慎重みから、友の秘密を探ることを避け、過去の悲しみを彼に呼び覚ますことを怖れていた。大いに知りたいのだけれども、妙に気おくれがして、オリヴィエの机の上にあるいろいろな写真も、近寄って見られなかった。儀式ばつた恰好の紳士と婦人と、十二歳ばかりの娘と、足下にうずくまっている大きなエバニール種の犬が写っている。

住みだしてから二、三カ月して、オリヴィエが悪寒に襲われ、寝込まなければならなかった。

クリストフは母のような気持になり、愛情深く心配して看病した。オリヴィエを診た医者は、肺炎が炎症を起しているのを発見して、病人の背中にヨードチンキを塗ってやるようにクリストフに頼んだ。クリストフはそれを大真面目にやっていたが、そのおり、オリヴィエの首に聖牌が掛っているのを見た。オリヴィエが彼以上にあらゆる宗教的信仰から離脱しているのを彼はよく承知していたので、驚きを隠せなかった。オリヴィエは赤くなって言った。

「記念品なんだ。かわいそうなアントワネットが、死ぬとき掛けていたんだ」

クリストフはぎくりとした。アントワネットという名は、彼には稲妻のようだった。

「アントワネット？」

「ぼくの姉だよ」とオリヴィエが言った。

クリストフは繰り返した。

「アントワネット……アントワネット・ジャンナン……君の姉さんなのか？……だけど……」机の上の写真を見て言った、「子供のとき、亡くなったのではないのか？」

オリヴィエは悲しそうに微笑んだ。

「これは子供のころの写真だよ。残念ながら他がない……二十五歳のときぼくと別れてしまった」

「ええ！」感動してクリストフは言った。「そして、ドイツにいたことがあるだろう、え？」オリヴィエはうなずいた。

クリストフはオリヴィエの両手を取った。

「ぼくは姉さんを知ってたんだ！」

「ぼく、それ知ってるよ」オリヴィエは言った。

彼はクリストフの首に抱きついた。

「かわいそうに！　かわいそうに！」クリストフは繰り返した。

二人とも泣いた。

オリヴィエが病氣であることにクリストフは気づき、彼を落ち着かせようと、無理に腕を蒲団の中に入れさせ、肩まで毛布を掛け、優しく涙を拭いてやって枕辺に坐った。そして彼をしげしげと見た。

「だから、ぼくは君を知ってたんだなあ。最初に会ったときから、わかったんだ」

（そこにいる友のことを話すのか、もういない彼女の話を話すのか、わからなかった。）

「だけど、君は……」しばらくして続けた。

「知っていて、なぜそれをぼくに言わなかったんだ？」

オリヴィエの目の中で、アントワネットが答えた。

「わたくしからは言えませんでした。あなたが察してくださるのです」

二人はしばらく黙っていた。それから、夜の静けさの中で、オリヴィエは床に寝たまじつと動かないで、彼の手を取っているクリストフに、低い声でアントワネットの話をした。——けれども言うてはならぬことを言いはしなかった。——彼女が包み隠していた秘密——そしてたぶんクリストフが知っていたことは。

*

それ以来、アントワネットの魂が二人を包んだ。彼らがいっしょにいるときには、彼女も共にいた。彼らは彼女のことを考える必要がなかった。二人が共に考えることはみな、彼女の中にあって考えていたのであった。彼女の愛が、二人の心が一つになる結びであった。

オリヴィエはよく彼女の面影を想い起した。それは切れ切れの思い出や短い物語であったが、彼女の内気な優しい仕種や、落ち着いた若い微笑や、消えそうな体の物思わしげな美しさ、そこに鮮やかに現われるのであった。クリストフは黙って聞き入り、目に見えぬ女の友の映像を追っていた。誰よりも貪婪に生を満喫する天性で、彼はときどきオリヴィエの言葉の中に、オリヴィエには聞かえない深い響きを聞き、オリヴィエ以上に、若くして亡くなった存在に同化した。

本能的に彼は、オリヴィエと共にいて彼女の代りになった。不器用なドイツ人が、アントワネットと同じこまやかな注意や世話を、自身気づかないでやっているのを見るのは、まさに感動的光景である。彼はときおり自分でも、アントワネットの中のオリヴィエを愛しているのか、オリヴィエの中のアントワネットを愛しているのか、わからなくなる。優しい心でいっぱいになって、彼は黙ってアントワネットの墓に参ることがある。そこへ花を献げる。オリヴィエはながいあいだ気づかなかったが、ある日、墓に

新しい花があるのを見た。けれどもクリストフが来たという証拠を得るのは、容易でなかった。おずおずそのことを彼に話そうとすると、クリストフは不機嫌になって、急に話を外らしてしまった。オリヴィエに知られたくない。強情に隠しつづけていたが、とうとうある日、イヴリーの墓地で二人は出会ってしまった。

オリヴィエのほうではまた、クリストフには内密で、彼の母に手紙を書いていた。ルイザに、息子の消息を伝え、彼に対する自分の友情と、どのように彼を尊敬しているかを書いた。ルイザは、感謝でまごついてしまった下手で卑下した手紙で答えたが、今でも息子に小さな子供のようを書いていた。

*

愛情に満ちたなかば沈黙の時期——なぜともなく、すばらしい、楽しい静けさ——の後で、彼らの舌ははぐれてきた。友の魂の中に発見の航海をするのに、幾時を費したのであった。

二人は互いにずいぶん異なっていたが、いずれも純粋な地金でできており、そしてそこでは互いに同じでありながら、大いに異なっていたから、なお愛し合っていた。

オリヴィエはひ弱くて、困難と闘うことができない。ある障害にぶつかると、後退りしてしまふ。怖いからではない。いくらか臆病のせいでもあるが、それよりも、勝つために行使しなければならぬ、乱暴で下等な手段が嫌なのである。彼は出稽古をしたり、例によって恥ずか

しいほどの報酬で、芸術の著書をしたり、雑誌の原稿を書いたりして稼いでいるが、それらもたまで、けっして自由ではなく、つまらない問題に關するもので——自分が興味を感じる事柄は喜ばれず、彼に何がいちばんよくできるとか、聞いてもくれない。彼は詩人である。ところが評論を書くと言う。彼は音楽を知っている。すると絵画のことを書かされる。そこでは平凡なことしか言えないのである。自分で知っているのだが、それが喜ばれるのである。だから、彼は凡人むきに、凡人が解る言葉で書いていたが、とうとう嫌になって、書くのを断わってしまった。彼が喜んで書けるのは、小さい雑誌しかなく、これは払ってくれない。しかし彼は、他の多くの若者と同様それに奉仕した。なぜなら、そこでは自由だからであり、自分で価値があると思うものをなんでも発表できた。

彼は表面穏やかで、丁寧で、忍耐強く見えるが、過敏な感受性を持っており、すこし強い言葉を聞くと、血が煮えくりかえるほど傷つけられ、不正に会々と顛倒してしまふ。そのことで自分のためにも、他人のためにも苦しむ。数世紀昔にあった汚ない事でも、自分が被害者だったみたいに痛憤し、害を蒙った者の不幸を思ひ、同情しても、数世紀も距りがあるのを思つて、蒼くなり、わななき、不幸になってしまふ。そういう不正を目のあたり見たりすると、憤激のあまり体じゅうが震え、ときには病気になる。そして眠れなくなる。自分でそういう弱さを知っているから、強いて落ち着いていようと

するのだが、一度怒ると見境がなくなり、人が許しそうなようなことを、つい口にしてしまふ。自分でそれを知っている。いつも激しいクリストフよりも、彼のほうがより恨まれる。なぜなら、激昂すると、クリストフ以上に、オリヴィエは本当に思つたことを吐き出すらしいが、實際そのとおりだった。彼は、クリストフのように盲目的な誇張で人を判断できないのである。そこで彼は口をつぐみ、議論するのがばかしく避ける。そしてこの我慢のために苦しまう、あるいは自分を最後まで主張し得ない内気のために苦しむのである。ルシアン・レヴィ・クールと、クリストフのことで議論した場合がそうで、結局自分が謝ってしまった。世間における自分の場、自分自身の場を定めるまでに、彼は幾度も絶望の危機を通過した。いっそう神経質だった青春期には、激昂と消沈の時期が、絶えず交互して急激にやっていた。最も幸福を感じている際に、悲哀が待ち受けているのをはつきり知っており、それで突然、それがやってくるのが見えないうちに自分自身にやつつけられてしまふ。これは不幸だとばかり言っておれない。おのが不幸をおのれに責め、おのが言葉、行為、正直さを告発して、自分自身に対して他人の立場を取ってしまう。心臓が胸の中でどきどきし、情けないほど煩悶し、息がつけなくなる。——アントワネットの死後は、おそらく、病める者の魂をさわやかにする曙の

光のような、愛する死者からさすやわらかな光のおかげで、オリヴィエはこの苦しみから脱却できないまでも、少なくともそれを諦め統御できるようになった。彼のこの内部の闘いに気づく者はほとんどなかった。彼はこの恥ずかしい秘密、虚弱で悩める体の始末におえない動揺を、自分の中に閉じ込めていた。これを支配することはできなくとも、それに痛めつけられないで、自由で明朗な知性が見守っていた。——「果てしなき動揺の最中に居つづける中心の平和」なる知性が。

それはクリストフを打った。彼はそれをオリヴィエの目の中に見た。オリヴィエは魂に対する直感を持ち、すべてに開かれ、なにものをも否定せず、憎まず、寛大な同情をもって世界を観照する、広やかで精細な精神の好奇心を持っていた。その目つきのさわやかさは、貴重な賜物であり、常に新たな、永遠に新たな心で、ものを愛でることができた。この内部の世界で、彼は自由で、広大で、崇高なおのれを感じ、自分の弱さや肉体的苦悩を忘れる。今にも消えてしまい、そんな悩みに満ちた自分の体を、遠くからすこし皮肉にながめていると、ある楽しみをさえ覚えるのであった。こうなるともう、自分の生に執着することなく、生それ自体にいつそう熱烈に執着する。オリヴィエは、行動の点では放棄してしまつた力のすべてを、愛と知性の中に持つて行った。彼には自身の実質で生きるだけの精気が足りない。彼は葛である。からみつかねばならぬ。そして自分を与えるとき、実

に豊かになる。いつも愛し、愛される必要のある、女性的魂である。彼はクリストフのために生れたのであった。こういうのが、偉大な芸術家の伴侶であり、その強烈な魂から咲き出たような、貴族的な魅力ある友人たちであった。レオナルドにおけるベルトラフィオ、ミケランジェロにおけるカヴァリエレ、若きラファエッロのウンブリアの友達、貧窮に落ちて老いたレンブラントに終生忠実だったフェルト・ヴァン・ゲルデル。彼らには師の偉大さはなかったけれども、師の中にある高貴なもの、純粹なものすべてが、これらの友の中にいつそう精神化されてあるようである。彼らは天才たちの理想的な伴侶である。

*

彼らの友情は双方にとって幸いであった。友がいのとき甲斐ができ、友のために生き、時の消耗に対抗しておのれの保全をはかるようになる。

二人は互いにおのれを豊かにしていった。オリヴィエは清朗な精神と病弱の体を持ち、クリストフは強靱な力と躍動する魂を持っている。これは盲目と中風病みだが、いっしょになった今は、大いに豊かな気がする。クリストフの陰では、オリヴィエは光の味を取り戻し、クリストフは、苦しくても不正に会つても憎んでいても楽天的でいられる、溢れる生命力と心身の頑健さを、いくらかオリヴィエに注ぎ込んだ。そして彼からより多くのものを取った。これが天才の

法則である。どのように多くを与えても、自分が与える以上のものを常に愛において奪い取る。「われは獅子なれば」、すなわち天才だからであり、天才とは、自分の周囲の偉大なるものすべてを吸収し、それをさらに偉大にすることを知らる者のことである。金は金持に集まると一般には言うが、力は強者に集まる。クリストフはオリヴィエの思想で自分を養い、彼の静穏な知性、超脱した精神、ものごとを理解して黙って支配する遠大な見解などを身につけた。そして友が持つ長所は、彼のような豊饒な土壌に移植されると、まったく異なった力となって生長するのであった。

二人は互いに相手の中に見出すものにおどろいていった。おのおのが、今まで自分で意識していなかった膨大な富、自分が属している民衆の精神的な宝をもたらした。オリヴィエは、フランスの広汎な教養と、卓抜せる心理的能力、クリストフは、ドイツの肉面的音楽と、自然に対する直感力であった。

クリストフには、オリヴィエがフランス人であるのが理解できなかった。彼が見たどのフランス人にも彼の友は似ていない。彼に出会う前には、ルシアン・レヴィ・クルを現代フランス精神の型だらけに思っていたが、こいつは漫画にすぎなかった。そこで、オリヴィエの例はルシアン・レヴィ・クル以上に思想的に自由であり、しかも純粹で堅固な精神がパリにも存在していることを、彼に示した。クリストフは、オリヴィエとその姉は、どうもまったく

のフランス人ではあり得ない、ということをおリヴィエに証拠だてたかった。

「お気の毒だがね」とオリヴィエは彼に言った、「いったい君はフランスのなにを知っているんだい？」

クリストフは、フランスを知るのに大苦勞したのだ、と抗弁した。ストウヴァンやルーッサンの社会で会ったフランス人というのはみな、ユダヤ人、ベルギー人、リニクサンブルー人、アメリカ人、ロシア人、レヴァノン人で、たまたに本當のフランス人がいるだけだった。

「その本當のフランス人のことをぼくは言っているんだよ」オリヴィエは言い返した。「一人にだって君は会っていないんだ。放蕩者の社会、快樂の獣どもさ。フランス人なんかであるものか。道樂者、政治家、ろくでなしだ。がやがや騒ぎだてたって、國民の頭の上を通り過ぎて、すこしもそれに触れはしないんだ。君は、秋のよい天氣と実った果樹園に引かれて来る蜂の群れだけ見ていて、勤勉な蜜蜂の巣、労働の都、勉強の熱に気づかなかったのだ」

「そんなことはないよ。ぼくは君たちの選り抜きの知識階級を見たんだ」

「なんだって？ 二、三十人の文士どもだらう？ 結構なことさ！ 科学と行動が大きな場を占めているただ今ではね、文学は國民の思想のいちばん浅薄な層になってしまったのだよ。」

その文学でさえ、君は芝居しか、しかも贅沢な芝居しか、見ていないだらう？ こいつはね、万国向き旅館にお泊りになる金持のお客さま用

の國際料理なんだよ。パリの芝居？ そこでなにをやっているか、働く者が知っていると思うかい？ パストゥールは一生に十遍とは行かなかったんだ。すべての外國人同様、君は、ぼくの國の小説、大道芝居、政治家の策謀を、ばかばかりしいほど大切に見ているんだ……ぼくはね、小説を読んだこともない女たち、芝居を見に行くこともないパリの娘たち、政治にまったく関係しない人間——知識階級を君が見たけりやいつもでも見せてあげるよ。君はぼくらの学者も詩人も見たことがないんだ。黙々として全力を尽している孤独な芸術家も、革命家の燃えさかる火も、見たことがないんだ。一人の偉大な信仰家も、一人の偉大な無信仰家も見ることがないんだ。それから、民衆については、言わなはいほうがいいよ。君を看病してくれたあのかわいそうな女以外に、君は民衆のなにを知っている？ どこでそれを見た？ 三階や四階に住んでいるパリ人を幾人知っている？ そいつらを知っていないければ、君はフランスを知らないのだ。みすばらしい住居の中で、パリの屋根裏で、沈黙した田舎で、善良で誠実な心の人間が、平凡な一生の間、真剣に考えつづけ、日ごと献身しつづけているのを、君は知らないのだ。——これこそ、フランスに常に存在していた小さな寺院なのだ。——数においては少ないが、表魂において偉大な、ほとんど知られていず、表に見える働きもしていないけれども、これがフランスの力なのだ。選良だと自称しているやつらが、始終腐敗しては、また新たにでてくると

きに、この力は黙々として、そして続いていくのだ。……幸福でありたいために、どんなことをしても幸福でありたいために生きるのではなくて、自分の信仰をまっとうするために、あるいはそれに奉仕するために生きている一人のフランス人を見たら、君はおどろくかい？ ぼくみたいな人間が千、万といるんだ。ぼくよりもっと値打があつて、もっと敬虔で、もっと謙遜な人間が、死ぬ日まで、けつして放棄しないで、一つの理想に、こたえてくれぬ神に、仕えているんだ。儉約家で、几帳面で、勤勉で、落ち着いていて、心の奥底に炎が眠っている、細民階級を君は知らない。——この犠牲になつた民衆が、貴族階級の利己心に反対して、昔わが『國』を守つた、青い目の老ヴォヴァンなのだ。君は民衆も知つてないし、選良なるものも知らないんだ。ぼくらの忠実な友であり、ぼくらを支えてくれる伴侶となる一冊の本でも、君は読んだことがあるか？ 莫大な奉仕と信念を費しているぼくらの若い雜誌があることを、君は知らんだろう？ ぼくらの太陽であり、その無言の光が偽善者どもの軍勢を怖れさせている精神的人物が、存在しないと、君は思ふかい？ 偽善者どもは真正面からは闘わないで、これらの存在をうまくだますために、目の前では平伏しているんだ。こいつのほうが奴隷なのだ。奴隷こそ主人なのだ。君は奴隷を知っているだけで、主人を知らないのさ……君はぼくたちの闘いを見たらう。そして無茶な混乱だしたね。それは、君に本當の意味が解らなかつたね。